

之れに反して米國民の震駭驚愕と失望落膽と憂愁悲痛とは、丁度開戦劈頭二大遠征艦隊全滅の凶報に接した時の日本國民の狀態のやうであつた。而も米國民の震駭驚愕と失望落膽と憂愁悲痛とは、開關以來の連戦連勝に對する熱狂的メートルが最高度に達して居ただけ其れだけ反動的に日本の夫れに比してより大なる震駭であり驚愕でありより大なる失望落膽であり、より大なる憂愁悲痛であつた。總ての新聞は口を極め筆を揃へて太平洋艦隊司令官の不用意不注意輕率の行動を非難した。全然無警戒を以て敵國に近づき、軍略上極めて重要な敵國の領土を占領せんとした無謀を非難して止まなかつた。識者といふ識者、學者といふ學者は悉く口を極めて艦隊司令官及び幕僚の無能無策輕率を責めた。否な米國民は悉く司令官無能を叫び、未曾有の敗辱史を作り米國の歴史に大汚點を印刻した大罪は斷じて永久に寛容すべからざるものであると絶叫して已まなかつた。政府

部内に於ても司令官の輕率なる行動に對する非難は喧々囂々たるものであつた。

然し、如何に司令官の無能を叫び、無謀輕率を非難しても、大事既に去つて艦隊悉く滅し、司令官以下亦た悉く艦隊と運命を共にし、小笠原近海の藻屑と消え、僅かに生残つた運送船乗組員のみは船諸共に日本に鹵獲され、一人の生還者もない、米國民幾ら怒つても最早如何ともすることが出来ない。

茲に於て、米國の輿論は二派に分れた。即ち一派は更により有力なる大遠征艦隊を送るべしと主張する積極主義論者であり、他の一派は遠征策戦を捨て、日本艦隊の來襲を待つて之れを邀撃するの策戦に出づべしと主張する消極主義論者である。而も此の全然相反した二つの主張は實に民間のみでなく、政府部内に於ても積極主義論者と消極主義策戦論との二派に分れ、兩者各固執して相譲らず、議論沸騰して容易に決定しなかつた。

然し、結局する所内憂外患の國狀は遂に消極主義論者の勝利に歸せしめ、從來積極主義策戦を採り來つた米國は、茲に一轉して消極主義策戦即ち守勢的策戦に一變したのであつた。

單に太平洋艦隊の零敗全滅のみの出來事であつたら、米國は決して策戦の根本方針を變更することはなかつた。更に第二第三の大々的遠征艦隊を送り、飽くまで攻勢的態度を取つて日本を屈服せしめんとしたのであるが、縱令太平洋艦隊が全滅せず、豫定計畫通り、満足なる戦報を齎らして居つたとしても、南隣墨國に宣戦せられ、墨國陸軍は無人の境を行くが如く、國境を越えて攻略を恣にしつゝあり、墨國海軍亦大策動を開始して米國要港を衝かんとして居り、數十萬の在墨日本義勇軍亦た墨國軍と策應して進撃攻略到らざるなき有様であるのみでなく、獨逸人及び獨系米人の陰謀團の跋扈跳梁は日に々々甚だしく、破壊は日々

數十件を算する有様であり、武器其他の軍需品製造工場、兵營、火藥庫等の爆破頻々として内憂外患一時に到る茶々無茶の有様で、富力世界に冠たる米國と雖も到底積極主義策戦によつて對日戦を進めることは不可能で、是等一切の事情は遂に米國をして守勢的方針に轉ずるの已むなきに至らしめたのであつた。

四五、暴威を恣にしたる怪艇の正體

朝鮮海峡に神出鬼没の不可思議なる行動の下に、日本商船を無警告に撃沈して莫大なる損害と多大の恐慌とを與へた怪艇退治に、日本海軍は二隻の快速驅逐艦一隊を以て組織したる搜索隊三隊を放ち、晝夜兼行不眠不休で撃滅せんとしたが怪艇は依然として變幻出沒を恣にし果ては朝鮮のみならず、玄海灘から山陰近海にまで出沒し、數十隻の商船を片つ端から撃沈した。

而も其狀況が丁度百年前の日露戦争當時に於ける浦鹽艦隊封鎖に向つた上村艦隊が、敵艦に脱出されて容易に取押へることの出来なかつた狀況に酷似して居たので、國民の輿論は搜索艦隊無能非難に傾き、各新聞は盛んに搜索艦隊の無能を痛撃し始めた。而して搜索艦隊を交迭せしむべしと主張し、一般國民亦た之れに雷同して、囂々の聲は國內に滿ち溢れるまでになつた。

日露戦争當時に於ける上村艦隊が、敵艦に封鎖線に突破されて取押へに全力を盡しても猶能はず、頻りに出沒を恣まにされたのが、必ずして同艦隊の無能であつたからでなかつたのと同様、搜索艦隊が怪艇退治役を承はつて活動して居るにも拘はらず、怪艇を取押へ得ないのみか、全然艇影をも発見し得なかつたといふのは、必ずしも搜索隊の無能のみに歸すべきではなかつた、全力を盡し最善を盡して居ながら、運拙くして、すかの嘴と食ひ違つたのである。つまり何て問が

悪いんでせうと云はざるを得ない程に間が悪かつたからである。

そこで海軍當局は最新式の搜敵用最大快速の潜水艦三隻及飛行機三臺を増援せしめた、六隻三隊の搜索艦隊並に増援潜水艦及飛行機隊は、三日以内に怪艇を撃沈又は捕獲し能はずんば、陛下と國民への申譯の爲め司令官以下自ら屠腹刎頸せんとの大決心大覺悟を以て怪艇の搜索に全力を傾注したのであつた。

各驅逐艦は艦長を始め數十名の將校下士卒が双眼鏡を目に當てたまゝ甲板に司令塔上に突立ち、前後左右を警戒し、橋上の速射砲臺には強大なる望遠鏡を据付け、係士官三名が交代に鏡面を見つめ、速射砲は率と云ば何百發でも連続射撃の出来るやうに準備し、二名の砲手は距離測定器を睨んで身構へ、無線電信機係りは絶えず飛行隊僚艦、潜水艦との連絡を取つた。潜水艦亦同様に縦横に水中を馳驅し、飛行機は一時間百五十哩以上の快速力を以て是亦空中を隼の如く飛び廻

り、僚機各艦と連繋し、晝夜活動して怪艇の搜索に努力した。

斯くて三日のうちの第一日は暮れ、第二日も終つた。然し怪艇らしい何ものも發見しなかつた。いよいよ第三日となつた。依然として怪艇の姿は見えない。司令官以下水兵に至るまで氣が氣でない。若し不幸にして此第三日も怪艇を發見することなくして終らんか。いよいよ自ら屠腹刎頸しなければならぬことになるのである。

正午も過ぎた。午後一時……二時……三時……四時となつた。依然として各機各艦共に怪艇を發見することは出来なかつた。

其日も暮れて海上は夜の世界と化した。而も其夜空は曇平として星なく月なく海水暗く風浪漸やく激しく各機各艦より放つ煌々たる探海燈のみ水上を走り、轟轟たる機關の音は舷側に碎くる激浪の響と戦ひ、冷寒骨を貫くが如き激浪の大飛

波は銃砲彈の如く甲板に襲來飛散し、動もすれば直立して警戒しつゝある將校下士卒の足を攫はんとする、而も各艦の將卒は此の危険と困難とを物ともせず、殆んど甲板に生えて居るかと思はれるばかり泰然自若として警戒を續けた。此時の各員の心にも目にも耳にも、風浪なく、夜暗なく、危険なく、只だ怪艇！といふ事のみで、司令官以下將卒の全心身は悉く鋭い目と耳になつてしまつて居た。

夜に入つて風浪は益々激しくなつた。殊に玄海灘の如きは山の如き巨浪荒れ狂ひ、流石の搜索艦隊も、之れを突破しつゝ怪艇を搜索するのは言語に絶した大困難で、監視將卒は浪に攫はれないやうに悉く身體を支柱や鎖などに縛りつけ、双眼鏡も手首に結びつけ、死者狂ひとなつて巨浪と戦つたのであつた。

然るに時は八時九時十時と経つても怪艇の姿は依然として見えない。時計の針が十一時を指すのも僅かに残す所三分となつた。司令官以下が屠腹するか否かは

茲一時間にして決する最後の危機となつた。

時に天祐か神護か、暗澹たる天空は次第に晴れ、紺碧の空には星影燦としてイルミネーションの如く煌き、十六夜ばかりの月は研ぎ上げた白銀の鏡の如く晃々として明光を放ち、風浪亦夢の如く去つて海上は静寂となり、聞ゆるものは機關の響と舷側に碎くる水の音のみで、渺茫たる碧海水銀を湛へたる如く、數哩の彼方に躍る飛魚の姿さへ鏡上に映するほどであつた。

驅逐艦の一隊が玄海灘を搜索し、進路を西北に轉じた時、其の右方五六哩の海中を索敵しつゝ、該驅逐艦隊と連絡を取つて居た一潜水艦は、驅逐艦隊と同艦との中間の前方に艦種不明の一艦が西に向つて航行しつゝあることを感知機によつて知つた。そこで潜水艦は暗號で合圖の無線電信を發して見たが、何等の合圖もない。又進路を變じた様子もない、依然同じ速力を以て同じ方向に進行を續けて居

る。念の爲め數回合圖を發して見たが、矢張り何等の反響もなかつた。

或は怪艇か？……と思つた潜水艦の想像は、是れによつて正に確かに僚艦でなく、數日來狂暴を逞うして居る怪艇であることが分つた。

潜水艦長は直ちに最近距離の僚艦に知らすべく無線電信係に命じた。無電係士官は直ちに近距離の僚艦に向つて、

『怪艇發見！ 貴艦と當艦の中間前方五哩三分ノ一の水中を西に向つて進行しつゝあり、貴艦と略同速力なり、警戒を要す！』

と發信した。驅逐艦隊からは直ちに

『警戒正に受領す、戦闘の準備一切成れり！』

と返電を發したが、其返電が潜水艦に達して五分間も経たないうちに怪艇の進路は急に驅逐艦の方向に轉換された。

潜水艦は再び驅逐艦に向つて

「怪艇本發信一分前、進路を轉じ、目下貴艦の方向に進みつゝあり、進路を西方に轉せらるべし」

と注意を發した。驅逐艦は直ちに西方に進路を轉じた。ところが怪艇は又もや進路を轉じて日本驅逐艦隊の方向に進み始めた。怪艇は此時既に日本驅逐艦隊の所在を知り、之れを襲撃すべく接近しつゝあつたのである。潜水艇は、怪艇の此の再度の方向轉換によつて、怪艇が驅逐艦襲撃の目的を有して居ることを知り、急に進路を怪艇の方向に轉じ、最高速度を以て航行しつゝ、

「怪艇は貴艦隊襲撃の目的を以て貴艦に近づきつゝあり、當艦は目下怪艇を後方より襲撃すべく全速度を以て怪艇に接近しつゝあり、貴艦隊は進路を漸次北方より東方へ轉せらるべし！」

と驅逐艦隊に警告した。驅逐艦隊は潜水艦隊の警告に従ひ、全速度を以て漸次進路を北方より東方へ轉じた。怪艇も亦其れにつれて方向を轉換した。何しろ驅逐艦では怪艇が水面に姿を顯はさない限り、之れを攻撃することが出来ないのであるから、潜水艦の警報によつて適宜に行動する外はなかつた。之れに反して、怪艇の方では水中を進行するのであるから、日本の潜水艦に接近されない限り、驅逐艦の攻撃を蒙ることは絶對にないといふ利がある。而も此の怪艇は感知器を有するのみでなく、速度は非常に快速なもので、日本の驅逐艦に優る快速である。日本潜水艦は、其の速度と設備とによつて、支那や朝鮮叛徒のものでなく、必ず米國の潜水艦であらうと想像しつゝ追跡した。

其うちに怪艇は段々日本驅逐艦隊に接近し、其距離は殆んど二哩となつた。之れが更に一哩半となり一哩となり、半哩となれば、日本の驅逐艦隊は怪艇の魚雷

襲撃を受けなければならぬ。危機は刻々に近づいた。

追跡しつゝあつた日本潜水艦は今や氣が氣でない、怪艇が僚艦を距る一湮以内に接近しないうちに何うでも斯うでも射撃有効距離にまで接近しなければならぬといふ意氣込みで最大急行を始めた。

數分間の後には、潜水艦と怪艇との距離は一湮以内となつた。距離測知機係りは間斷なく敵艇との距離を報告した。全艦員は勇氣頓に百倍し、互に顔見合せて鐵拳に汗を握り、快心の微笑を交換した。

斯くて怪艇との距離は千メートルとなり、九百メートルとなり、八百メートルとなり、遂に六百メートルにまで接近した。測知機の示針が五百五十メートルを指した時、砲手の手は發射機のハンドルに觸れた、同時に巨大なる水雷は音なく發射管を離れ、彈丸の如き速度を以て水中を怪艇に向つて進んだ。

命中！ 命中！ 魚雷は正に確かに怪艇に命中した！ 水雷が發射管を離れて一秒も經たないうちに強大なる海水の動搖を感じた。之れ水雷が怪艇に命中した反應であつた。

間もなく水面には破壊された艦の破片やら食糧品や紙片其他の器具機械の破片や乗組員の死骸等が渦を卷いて浮き上つた。然し、怪艇が日本潜水艦の魚雷に破壊されると殆んど同時に、日本驅逐艦隊の一艦は怪艇より發射した魚雷の爲めに艦底破壊され、怪艇と前後して沈没して仕舞つた。

潜水艦は直ちに僚艦隊に向つて怪艇撃沈の信號を發した。そして水面に浮揚しつゝ、怪艇の爆破沈没した海上を調査して見ると、果して怪艇は見事に潜水艦の魚雷一發の爲めに撃沈されてあつた。

そこで、潜水艦は浮流して居る怪艇の破片や乗組員の死骸などについて仔細に

検査して見ると、驚くべし、怪艇は米國艦隊に屬するものでもなく、支那艦隊の一部でもなく、實に朝鮮獨立陰謀團に屬するものであつたのである。

朝鮮の獨立陰謀團が何うして斯かる新式の快速潜水艦を有して居たかといふに陰謀團は日米開戦前より、該潜水艦を米國より購入し、米國旗或は支那旗を翻へして、恰かも米國か支那の潜水艦であるかの如く装ひ、以て日本の目を掠めて居たのであつた。

而して彼等は日米開戦以來、米支兩國と連絡を取り、常に日本海軍の行動を偵察し、之れを一々米支兩國に察報し、日本の不利益を圖つて居たのである。

四六、滿洲日本軍の全滅

支那共和國が、米國の尻馬に乗り、無法にも日本に對して宣戦するや、日本も

亦之れに應じて宣戦し、直ちに陸海軍の行動を開始したのであるが、日本は先づ朝鮮から數軍團を急派し、滿洲駐屯軍と協力せしめ、他方に於ては内地より數軍團を輸送し、青島、大連に上陸せしめ、兩軍相策應して北京を挾撃し、青島上陸軍の一部をして南方との連絡を中斷せんとする策戦を執つたのであるが、支那も亦敏速なる行動を執り、東三省の各督軍をして滿洲駐屯の日本軍を撃滅せしめ、朝鮮より侵入し來る日本軍を滿鮮の境上に阻止せしめんとし、青島上陸軍並に大連上陸軍は成るべく海軍をして輸送途中に於て撃沈せしめんとしたのであるが日本軍の行動が支那の行動に比して遙かに迅速であつたために、支那の策戦は殆んど悉く畫餅に歸して仕舞つた。

併し、黒龍軍は南下して哈爾濱を攻撃し、吉林軍は長春、開原間の滿洲鐵道を攻撃占領して奉天哈爾濱間の連絡を中斷し、奉天軍は吉林軍と呼應して奉天駐在

の日本軍に猛烈なる攻撃を加へた。

何しろ満洲駐屯の日本軍は混成の一個旅團に過ぎなかつたので非常の苦戦をした甲斐もなく全滅してしまつた。哈爾濱駐屯軍然り、奉天駐屯軍然りであつた。駐屯軍は朝鮮軍の來援を期待し、死力を盡して持久策を取つたのであるが、哈爾濱の如きは吉林軍によつて鐵道を占領され、無援孤立に陥り、縱令朝鮮軍が義州より侵入しても、先づ奉天軍吉林軍を撃破しなければならぬ。これが出來ない間は哈爾濱に援軍を送ることは到底不可能である。

哈爾濱の日本軍は催かに二個大隊に過ぎない少數で數萬の黑龍軍に包圍されながら、善戦但闘一時間を延し半日を支へるといふ風に持久策を取つたが、支那軍の攻撃は頗る猛烈で、空中よりは飛行機の襲撃があり、陸上よりは大小の銃砲彈雨の如く飛來し、一人斃れ二人傷き、遂に僅かに歩兵の一個中隊を残すのみとな

り、砲工兵其他は殆んど悉く斃れてしまつた。

斯くて第一日は暮れたが、第二日目になると支那軍の攻撃は第一日に比して更に猛烈となつた。飛行機は絶えず哈爾濱の上空に飛來し、日本軍の状況を偵察し一々本軍に報告するので、彈着は刻々に正確となり、砲彈の数はそれに準じて更に増加し、飛行機は爆彈投下を行ひ、兵營を破壊し、塹壕を破壊し、而もそれが砲彈と同時に或はチャンボンにやつて來るのであるから、寸地尺土も安全な處はない。

歩兵一個中隊となつた日本軍は、將校悉く斃れ、全軍の指揮は准尉が執つて居たが、之れも間もなく斃れてしまつた。兵數も三人減り五人倒れて第二日目の正午頃には僅かに軍曹以下二十餘名となつた。機關銃も破壊して役に立たない、航空機射撃砲も壞れてしまつた。彈藥も盡きた。即ち刀折矢盡きてしまつた。斯

ういふ状態になつては、幾ら一騎當千の日本兵でも如何ともすることが出来ない。幾ら死守しても來援軍の到着するまで支へて居ることは到底絶對に不可能の事である。百年前の日露戦争の時にも斯ういふ例はあつた。第一次世界大戦後西比利亞派遣軍の田中支隊もスクラムスコエ附近に於て過激派軍のために同様の状態の下に全滅の悲運に陥つた。

其うちに支那軍はドシ／＼市街に侵入し始めた。何しろ數萬の支那軍から見れば一個大隊や二個大隊位の兵數は物の數でもない。况んや二十名内外の殘兵の抵抗をやである。日本軍の殘兵二十餘名は遂に最後の運命に到達し各自屠腹して全滅してしまつた。

四七、奉天日本軍の苦戦

奉天の日本軍は混成一個聯隊であつたが、是れ亦非常の苦戦に陥つた。支那軍は奉天督軍麾下數萬の精銳である。如何に奮戦しても數に於て全然比較の問題にならない。武器に於ても比較にならない程の劣勢である、單獨の威力に於ては優るとも劣ることは斷じてなかつたが、衆に對して寡は遂に敗れざるを得ない。聯隊長は麾下の全軍を提げ、挺身陣頭に馬を進めて奮戦之れ力めたのであるが、如何んせん支軍の數は益々増加し、攻撃は刻々猛烈の度を加へ、飛行機の襲來は息も吐けない激しさで、聯隊長傷き副官殞れ、大隊長戦死し、中隊長斃るといつた風に幹部の將校は片ツ端から滅つて行く、果ては大尉が全軍の指揮を執るといふ有様で、屍山血河の慘憺たる光景は實に酸鼻の極であつた。

然し、何と云つても日本兵は流石に日本兵である。上官战友の目前に或は傷き或は死るゝのを目撃しても、勇氣を沮喪するやうなことは斷じてなかつた。上

官一人殞るればそれ丈け勇氣倍加し、戦友一人を失へば又それだけ奮起し、勇氣と努力と沈着とは、味方の數の減すれば減する丈け、敵の攻撃が猛烈になればなる丈け十倍百倍千倍し、正に一兵にして千兵に當るの概があつた。

されば其の戦鬪の光景は慘憺たるものであつたが復た實に壯烈極まり鬼神泣く光景であつた。中には全身に十數ヶの銃丸に貫かるゝまで銃を離さなかつたものがあつた。而も出血と疲労との爲めに倒るるや

「オイ戦友！ 俺はモウいかん、駄目だ、頼む、俺の分までやつて呉れ………頼む………」

と叫んで傍の戦友に自分の銃を託して瞑目する勇士も少くなかつた。すると頼まれた傍の戦友も

「宜！ 跡は俺が引受けた、貴様は死んでも俺はまだ死なんゾ！ 何糞ッ！ 俺

が仇敵は取つてやる。サア見て居れッ！」

と戦友の銃を執つて射撃し、心魂去らんとする戦友の最後を激勵するといふ風であつた。

されど、されど、兵數は次第に減じて一個大隊足らずの少數となり、彈藥も盡きた。飛行隊も僅かに二機を残すのみで、他は悉く壯烈なる戦死を遂げてしまつた。運命は最早や最後となつた。哈爾賓駐屯軍と同様の全滅の悲運に陥る時が来た。斯うなつては最早や如何ともすることは出来ない。少くとも五日間を支持し得れば義州より侵入しつゝある來援軍は到着するが、今やそれさへ不可能となつた。連日連夜三日間に亘つたが、支軍の攻撃は益々猛烈となるのみであるから、四日目には全滅より外に行くべき途はなかつた。

果然！ 果然！ 四日目の午後奉天日本軍は哈爾賓軍同様全滅し、奉天は支

軍の爲めに完全に占領されてしまつた。

四八、分水嶺摩天嶺附近の大惨戦

奉天に日本軍を包圍した奉天支軍の支隊は撫順停車場を占領し、新義州に至る鐵道を占領しつゝ、南下し、二道溝、雪裡店、小孤山の線に前線を置き、草河口の西方分水嶺に本隊を置き、滿洲軍に合せんとして朝鮮鐵道によつて國境を突破し來る日本軍を邀撃せんと、日本軍を待つた。

又た吉林軍の一支隊は、元山津より上陸して咸鏡鐵道により會寧に出で、豆滿江の上流を渡つて長白山脈方面より侵入せんとする日本軍を阻止すべく、長白山脈より琿春方面に亘る全線に逸早く配備し、日本軍を撃攘して咸鏡北道より逆襲撃に朝鮮に侵入せんと企圖の下に着々敏速に行動を開始したのである。

朝鮮より侵入せんとする日本の第一軍は、先發飛行隊の報告及び鳳凰城方面よりの情報により、支軍が日本軍の北進を阻止せんとして前記の線にまで進出して居ることも分つた。そして其兵力も約一ヶ軍團位のもので奉天督軍の麾下であることも分つた。而して又、前線が二道溝、雪裡店、小孤山を連ねた地點にあることも、本隊の根據地が雪裡店の北方厚河口の西方にある分水嶺であることも分つた。

そこで日本軍は、先づ戦闘飛行隊を以て敵陣襲撃を猛烈に行はしめた。強烈なる大爆弾を恰かも瓦礫を投下するが如く、息も吐かせず浴せかけ、投下せしめた。支軍素より之れに對抗するについて遺憾はなかつた。日本軍が第一着に飛行隊を以て襲撃を行はしめたと同様、支軍も亦飛行隊を以て日本軍を襲撃せしめ、日本の飛行隊を撃攘せんとして對抗怠りなかつた。

何しろ此頃の支那陸軍は、百年前の支那陸軍とは全然實質を異にした優秀なる陸軍たることを失はなかつた。支那の識者は由來支那の國力衰微し、領土の面積人口の豊富源の豊富日本に數十倍乃至數百倍して居るにも拘はらず、常に日本の爲めに左右せられ、國際的地位に於ても常に劣弱國として遇せらるゝは、畢竟支那に強大なる軍備がないからであることに想到し、第一次世界戦以來、銳意軍備の充實に努力し、教育ある新進實業家をして充分に腕を揮はしめ、新進教育家をして國民教育に全力を盡さしめ、小學校に於ても専ら實業と軍隊教育とを施し、強制的に義務教育を施し、國民一般の啓發に苦心努力した甲斐は空しからず、一時分裂して居た南北は完全に融合統一せられ、國民教育は年々進歩發達し、商工業は年々歳々隆盛發展し、無盡藏の大富源は外資を待たず外人の手を借らず、自國の實力と自國民の手によりてドシ／＼開發され、軍備も漸次充實して常備陸軍百

萬、海軍一百餘萬噸を算し、實力亦た昔のやうな馬賊の集團烏合の衆に等しき有形無力のものではなかつた。而して陸軍は一朝有事となり豫後備全部を動員すれば優に一千萬の大陸軍を編成することが出来、日本に一倍するの實力となつて居たのである。且つ又、製艦術も進んで大小の軍艦悉く自國の造船所で建造し、兵器の如きも大部分は自國製のもので、技術も非常に進歩して居つた。而も兵器の材料たる鐵銅の如きは殆んど無盡藏で、米國以上に豊富であることは世界の専門家の認めて以て異論なき所であつた。食糧の如きも、自足自給で數年間戦争を續け得る。燃料殊に石炭に至つては鐵以上の無盡藏で、全世界に一億年間一手に供給し得る程の量を抱有して居る。此大富力と大兵力とを提げ米國と策應して日本に當るのであるから、其勢の猛烈なること驚くばかりで、流石の日本人もともすれば受太刀となり、日露戦に於て滿洲に露軍を苦もなく粉碎したやうに容易

ではなかつた。

斯くて陸上に於ける日支兩軍衝突の序幕は開かれたのであるが、分水嶺、摩天嶺附近に於ける戦闘は言語に絶する大激戦で、支軍を撃退し遼河左岸に壓迫するまでには未曾有の大努力を盡し大犠牲を拂はざるを得なかつたのであつた。

四九、日本軍墨國上陸

第一遠征艦隊出發後、護衛艦隊に警護されつゝ、數十隻の運送船に滿載され、横須賀軍港を出發した一個軍團の陸軍は、ロスアンゼルスの方サンタバーバラとグエンチユアとの間の適當な地點に上陸する筈であつたが、意外にも第一遠征艦隊が布哇近海で全滅したので、上陸地點を變更し、墨國マンザニコ港に上陸した。

此時はまだ墨國の對米宣戰前であつたが、墨國民の歓迎は非常なもので、政府

も市民も滿腔の敬意を表し、有らゆる便宜を與へた。

實は日本政府も此の陸軍運送船の運命については非常の憂慮を以て報道を待つた。否、寧ろ第一艦隊と同様の運命に陥つたのであらうと憂慮して居た。出發以來杳として消息がないのみでなく、米國何れの地點にも上陸した形跡がなく、全く行衛不明であつたからである。

處が、該運送船隊は、本國出發數日後、東經百六十度五分北緯三十九度附近航行中、其無線電信機に第一艦隊全滅の際最後の艦より發した全滅の無線電信が感じたので、直ちに上陸地點を墨西哥マンザニコ港に變更し、航進路を南方に轉じ、ウエーク島の遙かの南方を迂廻し、布哇の南方五百哩の海上を航行し、墨西哥のマンザニコ港に到着したのであつた。無論上陸地點變更については、無線電信を以て本國に通信しようといふ議もあつたが、本國の無線電信機に感ずるだけ

ならばよいが、若し此事が米國艦隊の無線電信機に感ずれば、先廻りをされ遊撃される恐れがあるといふので、一切の通信をしなかつたのである。然しながら、運送船隊の航路は航海圖にない海上を航行したので、實は非常の冒險であつた。いつ何ういふ暗礁に乗り上げないとも限らない。何時何うして難破するやも知れない、又何時敵國海軍の警戒船や搜索敵艦に出會するか知れないのであるから、航海に於ては非常の注意と警戒とを以てしなければならなかつた。随つて、速力も全速力を以てする譯に行かない、随つて又マンザニロ港迄多大の日數を要したのであつた。

上陸した日本軍は墨國政府及國民の熱烈なる歡迎歡待に長途航海の疲勞も忘れた。何しろ國家危急の切迫して居る際であるから、悠悠休養などをして居る暇はない、上陸する片つ端からドシ／＼鐵道によつて輸送せられ、墨國軍及日本人義

勇軍團と策應すべく國境を通過して米國に侵入した。

五〇、墨國遣日密使の太平洋横斷飛行

墨西哥共和國は大統領、政府、國會、其他有力なる在野政治家の満場一致により、日本の危急を救ひ、共同の敵米國に大痛撃を喰はせんが爲め、事實のない日墨攻守同盟成立を中外に發表し、米國に對して直ちに宣戰、疾風迅雷的行動を執つたのであるが、何しろ日墨攻守同盟は捏造であるから、何うしても日本の諒解を得なければならぬ。密約的同盟でない以上は必ず同盟國雙方共發表するのが慣例で、一方のみ發表して他の一方は發表しないなどといふことは未だ曾て慣例にないことである。故に列國をして日墨攻守同盟成立の事實を信せしむるには、何うしても日本をして公式に中外に發表せしめなくてはならない。急場の間に合

せであるから同盟國の一方の提議によりて何時でも變更或は破棄し得る事にして置いても關はない。日本政府が列國の質問に對して其んな事はないなどと否認したら、墨國は世界に對して面目玉を踏み潰し、非常の不利な立場に立たなければならぬのである。故に墨國政府は密使を日本に派遣することにし、外務大臣自ら遣日密使となり日本に向つて本國を出發することになつた。然し、船では航海中米國の軍艦に發見される恐れがあり、且つ多くの日数を要するので、同國最大の遠征用飛行機に乗り、太平洋上を一氣に横斷することになつた。密使及び隨員數名を載せた、龐大なる飛行機は某月某日の深夜、明晃々たる満月の光を浴びつゝ、大怪鳥の如く離陸し、見る／＼雲間に舞ひ上り、八千メートルの高度を保ちつゝ、太平洋横斷の途に上つた。

五一、濠太刺亞の對日墨抗議

形勢斯くの如くなるに際し、此の形勢に乗じて戰禍を更に擴大すべき重大なる問題が起つた。即ち日墨攻守同盟及墨國の對米宣戰に關する濠太刺亞共和國の日本及墨國に對する強硬なる抗議である。

濠太刺亞は、多年英帝國の屬領として同國支配權の下にあつたが、第一次世界戦によりて勃然國際的地位を進め、一千九百二十年頃には既に獨立國的狀態で、英領といつてもそれは有名無實の觀があつたが、其後英國の羈絆を脱して純然たる獨立國となり、新興國として國際間に鮮かなる活躍振りをを見せて居たのである。而して日本に對する地理的、人種的、政治的、軍事的事情に於て、其利害關係米國と同様である所から、常に米國と或は默契的に、或は公然と提携して日本の

進展妨害を爲し、今次日米開戦前に當りても、濠太刺亞共和國は英佛と結んで米國側に立ち、日本を壓服せんと努めたのであるが、其結果は却つて日米開戦を促進する結果となつた。茲に於て濠國は外交的に米國を援助する方針を採り、米國をして絶對勝利者たらしめんと努力しつゝあつたが、戦争の経過は墨國の蹶起となり、墨國政府の日墨攻守同盟の發表となり對米宣戰となり、陸海軍の疾風の策動となり、のみならず一舉に日本を屠らんとした米國太平洋艦隊が小笠原近海に於て爆沈全滅するの意外なる事件となり、加ふるに米國內に於ては獨系米人並に在米獨人團の破壊行動勃發し、今や米國は内憂外患に忙殺せられ、積極的對日策戦を消極的守勢策戦に變更するの已むなきに至り、而も日本遠征軍は數十隻の運送船に滿載されて墨國に上陸し、墨國軍と策應して米國に殺到し、戦況は全然地位を顛倒し、米國は殆んど危機に陥つた。若し夫れ米國にして敗戦とならんか

太平洋の支配權は日本の掌握する所となり、米國のみならず濠國亦米國に等しき不利の地位に立たなければならぬ。されば日米戦争は單なる日米の戦争でなくて米濠對日本の戦争であり、太平洋支配權の爭奪であり、世界的覇權爭奪の戦である。即ち米濠が世界を左右する實權者となるか日本が世界を左右する權力者となるかの戦であり、實に米濠に取りては自國の運命を決すべき天下分目の大戦争である。然るに今や米國の状態は内憂外患に悩まされ、受太刀の姿となつた。濠國は最早や袖手傍觀して居る場合でない、裏面に於ける外交的援助のみでは危険である。支那米國側に起つて居るが、到底日本を有効に牽制する實力はない。機會あらば直ちに蹶起せんと待ち構へて居た濠國は、日墨攻守同盟は國際聯盟の規約に反するものであるといふを楯として直ちに日墨兩國に對し該聯盟の取消すべしといふ強硬なる抗議を持ち込んだ。而して回答期に二十四時間の制限を附

し、若し其時間内に満足なる回答に接せざる時は濠太刺亞共和国は直ちに一切の自由行動を執るべしと威嚇を加へた。

五二、日墨兩國濠國の抗議拒絶

然し此時は、既に密使墨國外務大臣が飛行機を以て太平洋横断を執行して日本に渡り、日本政府と交渉を重ね、墨國政府が獨斷を以て發表した日墨攻守同盟の事後承諾を求め、日本政府も米國太平洋艦隊を小笠原近海に撃滅したとは云ふものの、曩に失つた第一第二遠征艦隊の損失と差引勘定してもまだ損失は日本の方が米國に比して超過して居るのみでなく、石佛博士發明の三大新武器も出來上らず、内憂外患に攻められて危険の絶頂に達して居た所であるから、墨國の提議に快應し、戦争終結後慎重に講究して改定することとし、臨時的日墨同盟條約に調

印し、兩國共既に批准を終つた後であつたので、素より濠國の抗議に對し満足なる回答の與へらるべき道理はない。日墨兩國共、濠國が日墨同盟を國際聯盟規約に反するものといふは恰かも目糞が鼻糞を嗤ふに等しきものである、濠國は日米開戦前より既に教唆的に煽動的に米國を援助したる顯著なる事實があり、又米國の行動は徹頭徹尾明白なる反國際聯盟行動である、日墨同盟締結を國際聯盟に違反するものと云はば濠國の夫れ自らの行動も米國の行動も同斷である、濠國にして日墨同盟を國際聯盟違反なりとして抗議するならば、先づ濠國自らの反國際聯盟行動を責め米國の國際聯盟條約無視の行動に對して抗議すべきであるといふ意味でボンと跳ねつけて仕舞つた。

五三、濠太刺亞共和国日墨に宣戦す

濠太刺亞共和国日墨に宣戦す

日墨の拒絶は濠國の豫期した所であり、豫定のプログラムを豫定通りに演じたものであつた。されば濠國は日墨兩國より抗議拒絶の回答を接受するや、直ちに日墨兩國に對して宣戦した。日墨兩國亦濠國に對して宣戦した。濠國は日本が占領して居る比拉賓を衝き、支那艦隊と策應して臺灣、琉球諸島を襲撃し、青島を攻略し、大連を占領して日本軍の大陸輸送を中斷し、在支日本軍を無護孤立に陥らしむべく、又第一次世界戦に於て日本委任統治となれるクロネシャ即ちマールヤル、ラタク、レリク、バラウ、マリヤナ、トラツク諸群島を占領し、猶ほ米國海軍と共同策戦して墨國諸要港を攻撃し、墨國海軍を撃破して大陸軍を輸送し、米國陸軍と呼應して墨國を挾撃すべく、海軍の大策動を行つた。之れに對して日墨兩國亦海軍の大々的活動を開始した。

五四、世界大戰亂の序幕開く

斯くて日本對米國の戦争は濠支墨の参戦によつて日墨對米濠支の戦争となり、日米間の戦争は遂に茲に世界的大戰亂の序幕となり、殺人破壊の大禍亂は局面一轉して世界的となつた。随つて米濠側たる英佛も、日本側たる獨露伯伊等の諸國も行がゝり上蹶起参戦せざるべからざる形勢となつた。若し以上の諸國にして参戦せんか全世界は擧げて第一次世界戦當時以上の大戰渦に漂はなければならぬ。數千萬の人類は或は寸斷せられ、或は微塵に粉碎せられ、肉片となつて飛散し、骨灰となつて朽ち、鮮血となつて滅びなければならぬ。筆舌に盡し得ざる大焦熱地獄は世界の到る處に到らざるなく出現し、戦慄すべき大慘虐大酸鼻亦世界の到る處に到らざるなく演ぜられ、遂に世界地圖の大變動とならなければならぬ。

ないのである。

五五、各國識者の主張二派に分る

日米戦争が、單なる日米戦争に止まらず、支墨濠各國の参戦によつて戦争は漸く擴大し、第二次世界大戦の序幕となるや、各國識者學者の主張は主戦と平和とに分れた。

主戦論者の主張する所は、一言にして云へば、人類界より戦争を絶滅せしむるとは永久絶對に不可能であると云ふのである。即ち、人類が神と同様の程度にまで進化せざる限り、人類より闘争心競争心は無くなるものでない、此の闘争心競争心は人間の自然性であり、大自然の進化的法則である。大自然の一切萬物は總て此の法則に支配されて居り、此の法則は永劫不變不易の絶對法則である。平和論

者が此の大自然の絶對法則を無視して、世界より戦争を絶滅せしめんとするは恰かも無より有を作らんとするものであり、到底絶對に不可能なる事を可能ならしめんとするものであり、魚類を人類と同様のものとして人間の教育を施さんとするに等しきものであり、地球を太陽系外に離脱せしめんとするに等しき不可能の事である。されば世界の平和論者が、世界より戦争を永久に絶滅せんとせば、先づ人間の闘争性競争性の改變を行ふことが先決問題であり基礎條件である。既に人間に闘争性があり競争性があり、而も此の性は大自然の法則より出でたものであり、絶對に除去することの不可能なるものである以上、世界の永久的絶對平和を期せんとするが如き企圖努力は結局する所無意義であり徒勞である。縦令全世界の有らゆる國家人類を糾合聯結したる國際聯盟が成立しても、それは一時的のものである。即ち畢竟するに妥協策であり膏藥張りであり姑息手段に過ぎないも

のである。

姑息は所詮姑息であり妥協は遂に妥協であり膏藥張りは畢竟するに膏藥張りである。姑息手段の効力が無効になつた場合姑息は遂に破れなければならぬ。妥協不可能の重大なる事情が発生した場合妥協は遂に破綻とならざるを得ない。膏藥張りは膏藥の効力が消失した場合有名無實とならざるを得ないのである。斯くの如き一時的妥協策によつて世界の平和を圖らんとするが如きは、第一に大自然の法則を無視したもので、人類進歩の原則に反して居る。此點から見ると戦争の如きは必ずしも罪惡と稱することは出来ぬ。個人が社會に在つて他の何人よりも優越せんと欲し努力するのは人間の向上心の然らしむる所であるが如く、國家が他のいづれの國家よりも優越せんと欲することも其國家の向上的努力であり其國民の向上的進化作用である。

人間は群居的動物であり共存共立的のものであるといふが、結局する所は自己の生存より外に何物もないことになる。群居的といひ共存共立的といふのは絶對ではない、人間各自が自己の生存上の都合によるものである。例へば甲乙丙丁四人がいづれも同居することが自己の生存上有利である場合は同居し共同生活をしますが、其中一人乃至三人が他の三人乃至一人と生存上の利害に衝突を來し、同居して共同生活を爲すは自己の生存に非常の不利となるか危険となるかすれば其不利益を與へ危険を與ふる一人乃至五人を共同生活外に驅逐せんとするか、或は之れを斃して永久的に自己存立の保障と安全とを圖らんとするものであり、而も人間の存立條件は常に一切の人間が共通の場合のみでなく共存共立が有利の場合のみはないものである。個人に於て然るが如く多くの個人を以て組織したる團體たる國家の存立上の利害も亦萬國常に相一致する場合のみはない。時に全

然相反する事があり、一部分のみ反する場合がある。一國家と他の一國家又は一國家と數國家或は數國家と數國家との利害が一致しないのみでなく、何れか一方を排除しない限りいづれかの一方の存立が現在に於て危険であるか將來に於て危険である場合は、國力の一切を盡して相手國を排除せんとするは自然であり當然であり必然である。随つて戦争は常に必ずしも罪惡とのみ稱することは出来ない。否な、戦争は人間が進化しより以上の文明を作る爲めには或程度までは絶對に必要である。事實は何物よりも有力なる證明である。古來、世界は戦争毎に長足の進歩をして居る。個人も進歩するが國家社會も進歩し國際關係も進歩して居る。戦争の間斷なき連續は文明の進歩を止め退歩せしむるものであるが、平和の連續も亦文明を退歩せしめ墮落せしむるものである。

由來、健全なる文化的發達即ち健全なる文明は熱帶國或は寒帶國に於ては不可能である。寒暑冷熱の適當なる自然作用の行はるゝ暖帶國に於て初めて可能である。印度文明は遂に亡びたではないか、埃及文明も埃及に健全なる發達を遂げずして滅びたではないか。而して其等の文明の健全なる進歩發達は、すべて暖帶に屬する諸國に移されて始めて完成されて居るではないか。今日の世界の最高文明國は寒帶又は熱帶に屬する國であるか將た又暖帶に屬する國であるかを見よである。之れ即ち暖帶に屬する國は寒暑冷熱の自然作用が適當に行はれ、其國民に對して常に適當なる刺戟を與へて居るからである。世界に於ける戦争と平和とは即ち寒暑冷熱である。戦争を世界より永久に除かんとするは恰かも暖帶國をして熱帶國又は寒帶國たらしめんとするに等しきものである。各國が適當の時代に於て戦争するは各國の存立を鞏固にし各國の文明を進歩せしむる上に於て必要であり世界に於て適當なる時代に世界的戦争を行ふは世界の大掃除として大改革大改良

の手段として即ち世界の文明を進歩せしむる上に於て絶對に必要の事である。といふのが論據で、日米戦争も日米兩國が國家存立上絶對必要よりの戦争ならば、其目的を達するまで戦はしむべしであり、參加諸國も日米戦に參加する國家的絶對必要ありての事ならば、局外國は袖手傍觀し、絶對に嘴を容るべからずである。いづれか一方が倒るゝまで、將た共倒れとなるまで戦はしむべし、各國中にこれに參加する必要がある國は自由に參加すべく、參加の必要な國は局外にあつて靜かに其成行を見物すべし、と主張したのである。

之れに對して平和論者は、戦争は野蠻時代の遺風であり、人類の遺傳的惡癖である。野蠻時代の遺風たる惡遺傳を根絶することの必要なるは、恰かも文明人が野蠻時代の非文明的風俗因襲を脱することの必要であり、個人が惡疾の遺傳を根絶することの必要であるに等しきものである。

戦争是認論者は、闘争心競争心は人間の自然性であるといふが、是は人の性は人為的に矯正改善し得るものであることを知らざる僻論である。假りに百歩を譲つて人間の闘争心競争心が先天性であつて、且つ之れが絶對に矯正も不可能のものであるとしても、慘虐なる殺戮の戦争でなくては其の先天性の闘争性競争性の満足を得ること不可能であることはない。殺戮的方法以外、即ち文明的手段方法によりて闘争性を満足せしめ競争心を擴充せしむることが出來るのである。

戦争を人類界より絶滅せしめることが不可能でなく、共同的努力によつて將來絶滅せしめ得るものであることは歴史が明かに之を證し之を語つて居る。

見よ、世紀の進むに従つて戦争の数は漸次減少して居るではないか、現代を距ること遠き時代ほど戦争の回数が多いではないか。之れ即ち文明の進歩した立證であり、人類が共同的に戦争を回避せんとする努力の結果であり、此の努力が更

により大なる共同的熱心の下に行はるれば將來遂に戦争を人類界より絶滅せしめ得ることを事實によつて證明して居るものではないか。

人間が結局する所個人主義であり自己の利益本位主義であり、自己の生存生活が第一義であることは事實であつても、孤立的には決して有効な生存生活を爲し得るものでない。人智の發達文明の進歩はより多數の人類の共同的生生活團即ちより大なる社會に於てより大でありより迅速である。而して此の個人の利益本位自己生存第一義は必ず常に他との摩擦衝突を避け、相互的に之れを幫助し、より大なる個人の利益幸福を得ることが出来る。一人より二人の方が生存上有利であり、二人より五人、五人より百人、百人よりも千人の方がより小なる努力を以てより大なる利益と幸福とを得ることが出来るのは、今日の國家組織が私的小團體よりもより大なる利益とより大なる幸福を各人に與ふることに於て有効有力であ

る事實を見ても分明である。

國民が各自に絶對に獨立的行動を爲せば國家は成立しないが、國民各自が各個に他と戦つてより有利なる生存を爲さんとすれば之れ全然野獸生活と異なる所はない。其幸福も利益も安全ではない、生命財産の安全は期せられない。日々不安と恐怖に満ちた生活をしなければならぬ。利益も亦小であり微であるを免かれないが、集團的勢力を利用すれば其幸福と利益とは更に數十倍し數百倍する。今日既に國民の團結力の鞏固なる國家は益々發展し、團結力の薄弱なる國家は衰微しつつある。

國民の幸福即ち國民各自の生存生活上の權利利益の確保増進は國家力の旺盛によりて期せられ、國家力の旺盛は國民の團結力の鞏固によつて期せられることは、戦争是認論者も否定すること能はざる事實であり眞理であるが、既に一民族

一國民間に於て共存共立的團結が不可能である以上、同じ人間である世界一切の人類間に平和的共存共立の團結が不可能であるべき理由はない。一民族一國民間に於ても、各人の利害は常に一致するものではない、又地方によりて事情を異にして居る。都會人と村邑人との生活状態には大いに相違した所があり、村邑生活者の利益とする所は常に必しも都會生活者の利益とする所と一致するものではない。村邑生活者の不利益は都會生活者に於て利益であることがあり、都會生活者の不利益は村邑生活者には却つて利益である場合がある。又同じ都會生活者、同じ村邑生活者と雖も、其都會の所在地の相違によつて、生活状態や利害に相違があるが、其等は行政的手段方法と、國民相互の互讓妥協とによりて圓滿なる進行を期することが出来、現に各國民は之れを實行して居る。一國民一民族間の互讓妥協が常に平和的に可能であり現に實行せられて居る以上、世界の各國民間

各民族間と雖も平和的に互讓妥協の成立が不可能であるべき理由はない。故に戦争を人類社會より根絶し永久の平和を確立し人類一切が互讓妥協によりて共存共立的大團結を爲すことは、決して空想でなく想像上の可能でなく、世界各國民の熱心と努力とによつて實現し得るものであるといふ論據に立ち、中立諸國は團結して日米戦争を速急に中止せしめ、國際聯盟規約に改訂を加へ、各國同時に軍備撤廢を斷行すべしといふ主張であつた。

此の全然相反した戦争是認論と平和論とは、中立國は勿論日米濠支墨國內に於ても、識者間に猛烈なる論戦が行はれ、示威運動も相當に行はれ、相對峙して屈しなかつた。

この世界的二大思潮は、從來の國際聯盟に對する不信認案であることは明白であつた。戦争論者も平和論者も、從來の國際聯盟が有形無力のものであることを

認めて居た點に於ては一致して居たのである。

勿論、此當時の國際聯盟規約は、第一次世界戦後に成立した當時のものに比すれば、幾多の修正改訂を加へられたものであつたのであるが、日米戦争を未發に防止し得なかつたといふ一事は、國際聯盟に權威のないことを明白に事實上に暴露したもので、戦争論者が、國際聯盟の如き所詮頼むに足らずと豪語し、寧ろ世界を二大勢力に分割し、其二大勢力の對峙均衡によりて平和を維持する方が、却つて平和保障上には有効有力であると主張したのは、決して暴論として一概に非難し去るべきものではなかつた。

而して又戦争論者は、聯盟諸國は聯盟成立以來今日まで 果して誠心誠意戦争の防止に努力する所あつたか何うか、規約には聯盟加入國は將來に於て軍備全廢を期すといふ明文があるにも拘はらず、加盟各國は實際に於ては全然此の規約に

反した事を実行して來たではないか、表面は軍備縮小と云ひ戦争回避といつても内實は各國共に武器の發明に熱注し、年々莫大の研究費を有らゆる美名の下に支出して來たではないか、そして各國は一朝戦争の場合は、如何にしてより強大なる威力を有する武器をより短時間により多く製造すべきかについて秘密研究を續けて來たではないか、そして其等の研究を列國に窺知されない爲めには有らゆる秘密手段を探り方法を講じて居るではないか。國際聯盟を成立せしめた最初の目的は戦争を防止し平和を保障するにあつたが、實際は却つて戦争の方法手段即ち戦術兵器の研究を秘密にさせ國際間を一層大なる危険に陥らしむる結果となつて居るではないか、國際聯盟成立前と雖も、列國の戦術兵器の研究は極力秘密主義を執つて居たが、聯盟成立後は更により一層の秘密主義を執るやうになり、其結果は、各國相互に於て、他國の軍備に關する真相を窺知すること不可能に至ら

して居る、之れ國際聯盟の如き姑息的無理な手段によつて戦争の絶滅を企圖したが爲めではないか、戦争によつて相殺戮することが惨虐行爲であり人類の最大罪惡であるならば、國際聯盟規約によりて或民族又は國民の生存上絶對に必要な發展を阻止し權利利益の擁護増進を強制的に抑壓することも殘忍行爲であり人類の最大罪惡ではないか、人類一人として先天的に人類何人をも殺戮傷害するの權能なしと云ひ得れば、人類一人として先天的に人類何人の生存上の發展を阻止し權利利益の擁護増進行爲を強制的に抑壓し得る權能はないのである。

個人的に生存競争優勝劣敗を認めながら、國際的生存競争優勝劣敗を否定し阻止せんとするは矛盾であり不自然であり邪曲であり非道理であり無法であり亂暴である。正當なる理由によつて行ふ革命は正當なる行爲として世界の何人も是認して居る所であつて、而も獨り國際間の戦争のみを罪惡として取扱ふは不條

理ではないか。正當なる理由によつて行ふ革命が正當行爲である以上、正當なる理由の下に開始せらるゝ國際戦争は正當行爲である。國際聯盟の規約する所が常に如何なる場合に於ても尠くとも聯盟各國の權利利益を満足に保障するものであり、一國一民族と雖も之れが爲めに幸福なる生活を奪はるゝものなくば、國際聯盟は眞に人類全般の幸福を保障するものであり、永久存置の必要あるものであるが、一民族一國民と雖もこれが爲めに幸福なる生活を奪はれ阻止され抑壓されるものがあれば、國際聯盟は一切人類に公平なるものでない。一切の民族一切の國民に公平に幸福を與へるものでない。國際聯盟成立以來約一世紀間に於て、國際聯盟は或民族の幸福を奪ひ或國民の權利利益に壓迫を加へ、自由の發展を阻止した事實は決して二三に止まらない。其理由の如何を問はず、他の正當なる權利利益を侵害し妨害することが罪惡であり不法行爲であれば、國際聯盟が今日まで幾

多の民族國民の權利利益を規約によりて侵害し妨害し抑壓阻止したる事實は正に確かに罪惡であり不法行爲である。と論じ、國際聯盟は有害無益なりと云ひ、斯くの如きは直ちに破壊し、自然の法則に従つて各國各民族の一切自由行動に放任すべしと主張した。

五六、國際自由同盟の風雲動く

斯くて戦争主義論者と平和主義論者との論戦は、中立國たると交戦國たるを問はず、随分猛烈に行はれたのであるが、論戦の結果は、單に紙上の言論のみに止まらず、世界的大會を開催せんとするに至り、各國の平和主義論者先づ實際運動に着手し、次で戦争主義論者も之れに對抗すべく運動を開始した。

白耳義、和蘭、瑞西等の平和主義者は、無線電信を以て各國の平和主義者に檄を飛ばし、三ヶ國中適宜の場所に於て世界平和主義者の委員大會を開催し、日米間の調停、國際聯盟規約の改訂に關する事項を討議せんことを提議した。

之れに對抗して各國の戦争主義論者も亦、同様檄を各國の同志に飛ばし、適宜の場所に同志の大會を開き、國際聯盟の解散、自由同盟問題の討議を行はんことを主張した。

斯くて平和主義論者と戦争主義論者との紙上の論戦は實際的となり、二大國際大會開催されんとするに至つた。形勢斯くの如くなつては各國政府も安閑として袖手傍觀的態度を取つて居る譯に行かない。平和主義者の代表委員に旅券を交附するとすれば、矢張り其反對派たる戦争主義者の代表委員に對しても旅券を交附しなければならぬ。一方にのみを許可して他の一方を許可せぬといふ片手落ちのことは出来ない。各國共政府は同時に兩派の委員出席を許可すべきか否かについ

て迷はざるを得なかつたのである。

そこで、政府は政府として意見の交換を行ひ、各國政府の意見の一致した所によつて決定することにしよふといふので、各國政府は無線電信を以て駐外大使に命じ、該問題に對する協議を行はしめたのである。

各國政府内にも平和主義者があつて、政府内の意見も容易に決定しなかつた。或は二派同時に委員の大會出席を許可し、各々自由に討議せしめ自由行動を執らしむべしと主張するものがあり、或は世界の平和は世界人類全體の要望であり真心の叫びである、戦争主義者の如きは人間社會を動物化せんとするものであり、國家國民を化して野獸的國家國民たらしめんとするものであり、文明を破壊せんとする全人類共同の敵である。斯くの如き主義者の代表者をして大會に出席せしむるは國家の恥辱であり國民の不名譽である。各國政府は一

致して平和主義者の委員出席のみを許可すべしと主張するものがあり、戦争主義者亦之れに對して反駁を加へるといふ風に、甲論乙駁、一國政府と雖も直ちに決定したものはなかつた。

然し政府としては平和主義者にのみ厚くして戦争主義者に對して冷淡であることを許さぬ。何とすれば、平和主義者も戦争主義者も共に自國の發展自國民の權利利益を擁護増進せんとする誠心誠意より出でたるものたることに於ては相同じであるからである。平和主義者が善良なる國民であれば戦争主義者も亦善良なる國民であらねばならぬからであり、戦争主義者が非國民であれば、平和主義者も亦非國民であらねばならぬからである。

そこで、各國政府は協議の結果、戦争主義者委員の國際大會出席を許可しないと同様、平和主義者委員の國際大會出席をも許可しないといふことに決定し

各國政府は各自國の輿論を公平に代表して協議することとし、政府委員の國際大會を開催することに決定した。

萬國政府委員の國際大會は瑞西の主都ベルンに於て開催せらるゝこととなり、各國は正委員一名、副委員二名、顧問十名以内を出席せしむることとなつた。

斯くて大會は豫定の如く開催せられ、幾多の波瀾を経たる後、兎に角、戦争が何れの國民に取りても好まじきものでないといふことに一致したが、然らば此の好まじからざる戦争は如何にして可及的回避するかといふ問題については、國際聯盟の改造説と國際自由同盟説とに分れた。國際聯盟改造説は現在の薄弱なる國際聯盟を改造し、絶對權威を有するものたらしめようといふのであり、國際自由同盟説は現在の國際聯盟は有名無力のもので如何に改造しても到底絶對權威を有せしむることは不可能であるから、此際斷然解散し、各國は自由に他國と同盟を

締結し、實力の均衡によりて國際間の平和を維持しようといふのであつた。

然し結局は一應國際聯盟の改造を試み、改造の結果によりて依然有名無力たる場合は斷然解散して國際自由同盟主義を採用すべしといふことに妥協し、一先づ會議は終了となり、各國政府委員は夫れ々自國に引揚げることになつたのであるが、第一次世界戦當時の如く、各國一致した國際聯盟説でなかつたことは事實であつた。即ち、國際聯盟が所詮有名無力にして、到底強大國間の戦争を防止すること不可能であることに愛想を盡かして居る國が少くなく、寧ろ自由同盟主義によつて平和を維持する方が遙かに有効有力であると信じて居た國が多かつたことは蔽ふべからざる事實であつた。

謂はゞ、國際聯盟の時代を過ぎて國際自由同盟の時代に入らんとする氣運が動いてゐたのである。姑息的手段によりて平和を維持せんより、各國民の實力によ

つて積極的武裝的平和を維持せんとする風雪が漸やく擡頭して來たことは、各國政府は勿論一般國民も認めざるを得なかつたのである。

歴史は常に循環して止まないといふが果して眞理であるとするれば、時代は既に國際聯盟の時代より國際自由同盟の時代に循環して來たのである。知らず、世界の永久的平和は果して國際聯盟によつて保障せらるゝであらうか。將た又國際聯盟瓦解して國際自由同盟主義によつて支持せらるゝであらうか……？。

五七、中立國團結して講和提議

斯くて日米戦争は、墨濠兩國の參戰によつて急轉直下の性質を一變し、世界的大戰亂の場面の第一齣となつたのであるが、然し世界的大戦争の結果が、如何に戰慄すべき慘憺なる結果となるかは、其等各國は勿論其他の中立諸國で既に千

九百十四年に勃發した第一次世界戦によつて痛切に經驗して居る所である。能ふべくんば速かに現戦争の終結を圖り世界的擴大を防止せんとする希望を有する事に於ては、嚴正中立たると好意中立たると將た又準中立たるとの如何を問はず各國共に一致する所であつた。

そこで英佛獨露伊伯等の諸國を除く他の大小中立國は、急遽調和調停について互に意見の交換を行ひ、絶對無併合無賠償主義調停を決議し、其決議を提げ團結して以上の各國を動かし、交戰各國に對し、絶對無併合無賠償主義調停案を交附した。處が此の中立國の調停提議に對しては、日本側の回答と米國側の回答とは非常の懸隔あるものになつた。否、全然相反した回答が與へられた。即ち日本は元來今次の戦争が日本の意思より起つたものでなく、一に米國及其與國の挑戦によつて誘發されたるのであるから、敵國側にして講和を欲するの意あらば、日本

は何時にても該調停案を基礎として平和を議するに躊躇するものでないといふ回答を與へ、墨國亦日本と同様の回答を與へたのであるが、米國及濠國は勝敗を決する迄は斷じて講和問題を考慮するを欲せず、何となれば今次の戦争は米國乃至濠國の挑戦によりて發したるものでなくて、一に日本の侵略的野心不正なる企圖によりて自衛上餘儀なくせしめられたものであるからであるといふ回答を以てし中立國の提議を斥けたのである。然しながら其強硬なる態度の表皮を剥いて見ると米國は寧ろ此際講和するの總てに於て有利であることを自覺して居つた。而して適當の時機に於て有利なる條件を以て講和しようといふ十分の意思があり且つ充分の用意があつたのであるが、斯くの如く、中立國の講和提議に對し、強硬な態度を取つて拒絶したのは、オインソレと提議に應じて講和問題を議するのは、如何にも米國が最早や戦争繼續力なきを自覺せるもの、如く思はれんことを恐れ、

腹の底を見透されまいとするための手段であり策略であり技巧であつたのであつて、是の事實は米國自ら欺くことの出来ない事實であつたのである。然らば濠國は如何といふに、米國の如く内實講和を欲するものでなく、飽くまで戦争を繼續せんとするにあつた、日米戦の經過により、日本の戦争能力が何程のものであるかを窺知し、米濠聯合して積極的策戦を執れば、必ず近き將來に於て日本をして無條件屈服に至らしめ得るといふ確信があつた。而して中立國への回答は其固き確信によつて爲されたものであつた。故に米國政府が濠國政府に對し、中立國の講和提議に關し、濠國が考慮するの意思ありや否やを知るべく、内議せんことを申込んだ時、濠國は日本を無条件降服の窮地にまで追詰めるまでは斷じて戦争を中止せずと主張して已まなかつた。そして濠國は米國政府に對し、米國の獅子身中の蟲たる在米獨人及獨系米人全部を檢舉拘禁して、彼等の破壊陰謀を一掃する

の大英断を行ひ、濠國と聯合して對日策戦に積極主義を探らんことを極力勸説した。米國に於ても新聞は一般に濠國政府の主張と同様の主張を爲し、在米獨人及獨系米人全部を檢舉拘束し、戦争を飽くまで繼續すべし、然らざれば餘り遠からざる將來に於て日米戦再發すべきは必然にして、其時こそ米國は噬臍の悔に深はさるべしと論じ、政府部内に於ても亦た非講和主義論者が尠くなかつた。

五八、平和克復

然し、米國政府は、濠國並に米國內の戦争繼續論者の主張に従つて飽くまで戦争を繼續することは到底不可能の事情があつた。即ち最も重大なる事情は日本に於ける三大新武器の發明と國內に於ける獨人及獨系米人の一致團結したる破壊陰謀とであつた。日本の三大新武器が多少でも製作され、之れが實際戦争に使用せ

らるゝに至れば、米國が唯一の誇りとし頼みとせる空中魚雷のみを以てしては對抗すること不可能であるのみでなく、繼續すれば繼續する程米國の不利益となり遂に却つて日本の前に無條件降服するの外なきに至ることは明かだ、假令再戦するにせよ寧ろ此際引分的講和をした方が有利であつたのである。濠國は持久戦を以てすれば必ず日本を屈服せしめ得るといふ確信に立つて容易に講和問題に觸れようとしなかつたのであるが、中立國の講和提議を飽くまで拒絶するとすれば、世界の同情を失ふのみでなく、中立國全部を日本側に蹶起せしむる恐れがあり、恰かも第一次世界戦に於ける獨塊と同様の窮境に陥るべきは分明である。是等の事情に束縛されて、遂に米濠も講和に傾向し、形勢は再轉して瑞西の首都ベルンに於て講和會議開かれ、日墨米濠支交戦五個國の講和委員は素より、英、佛、獨、露、伊、伯、白、埃、洪等を始め大小數十の中立國委員出席し、甲論乙駁議論百

出して議容易に決せず、纏らんとして纏らず、破れんとして破れず、會議を重ねること實に三十有餘回、時日を費すこと殆んど一百日に及んだが、遂に中立國提議の如く絶對無併合無賠償によつて平和條約の調印成り、一ヶ月後に至つて批准完了し、全世界を戰亂の巷と化せんとした日米戦争は茲に一先づ終結を告ぐるに至つたのである。

五九、一時か…？ 永久か…？

斯くて、日米戦争は平凡に局を結び、平和は意外に早く克復され、暗愴として太平洋上に漲つて居た漠々たる戰禍の妖雲は去つたのであるが、之れ果して永久的平和であらうか、或は米國新聞が叫んだやうにホンの一時的平和に過ぎない假平和で、早晚再戰の機會が到來するであらうか。

(をばり)

大正九年五月十八日印
大正九年五月廿一日發

行刷

不許複製

小説日米戦争未來記

【定價壹圓五拾錢】

著者 樋口 麗陽

發行者 神戶文三郎
東京市小石川區白山前町卅三番地

印刷者 森田愛介
東京市牛込區東五軒町四十番地

發行所

東京市小石川區白山前町
(振替東京四七七八番)

大明堂書店

(所刷印堂明大)

言ひ知れぬ面白味に痛快無比の快著

●村上浪六先生著 最新刊

小説水車

版四評好

「甲」浪六先生の「水車」を買つて讀んだか？
「乙」イヤ實に面白く徹夜して迄讀んだ、例に仍つて先
生獨得の人生觀に接した御蔭にすつかり樂觀的になつて先
勉強も出来るし、よく働けるよ全く必讀の書だね。

●吉岡鳥平先生著並畫 最新刊

漫文 當世百馬鹿

版四評好

●本書をサデモクラシー君の戸籍調べ
録にサボタージュの有難味
讀者が異口同音に賞讚の聲嘖々

四六判全一冊
三百四十頁
金壹圓八拾錢
送費拾錢

四六判全一冊
二百六十頁
金壹圓卅錢
送費六錢

發兌 東京東區白土町前山八番 大光明堂書店

181
95

終

京 東
行發堂明大